

管理通貨の諸問題 (講演要旨)

教授 森川太郎

これは去る二月二十五日大學生會に於て行はれた校友會二月講演會に於ける講演の概略を集録しましたもので、この點文責一切は記者にある事勿論です。

今度の議會に於て政府は從來の日本銀行條例其他の法令を改廢して新たに日本銀行法を制定し、通貨制度としては管理通貨制を採用する事となつたのであります。そこで管理通貨など云へば目新しい事の様に考へられるのでありますけれども、これは實は昭和六年末以來行はれてゐる通貨の金兌換停止によつて既に行はれてゐる事でありませぬ。即ち我國貨は端的に云へば不換紙幣となつてゐるのであります。さればと云つて此事の爲めに通貨の價值が下落して一片の紙片になつてしまふと云ふやうな事はなかつたのであります。

そうであるとしみますと、紙幣に價值があるのはその後にある金の故であるとして一般に云はれて來た事と異つてくるのであります。斯く通貨が金を離れて尙適當な價值を保つてゐると云ふことは、勿論貨幣當局の種々な政策の運用に依つて可能とせられたのであります。これが過去約十ヶ年間に亘つて實行せられて來たのであります。この場合通貨は管理せられてゐると云ふのであります。今更には更にこれ等の事實を法制的に確認しやうと云ふのであります。

近年の世界の通貨事情を見ましても我が國同様過去十ヶ年餘りに亘つて各國共に管理せられた通貨となつてゐます。一九三一年秋の英國の金本位停止を先驅として各國の通貨は續々と金の基礎を離れ、フランスを中心とした所謂金ブロックも一九三五年遂に崩壊するに至り、茲に世界の金本位制は全然見られなくなつたと云つても良い位になりました。今や世界の通貨は殆

大正十一年六月十五日創刊
昭和十七年三月十日印刷
昭和十七年三月十五日發行
發行所 大阪市北區北區
印刷所 谷口印刷所
大正十一年六月十五日創刊
昭和十七年三月十日印刷
昭和十七年三月十五日發行
發行所 大阪市東區川島町
印刷所 關西大學學務局

第一 管理通貨の諸問題	森川太郎
第二 共榮圈經濟學の課題	森本茂雄
第三 戰時配給制度と百貨店の將來	加藤昌秀
第四 學内報	(七)
第五 校友會報	(八)
第六 會員消息	(八)
第七 會費拂込者氏名	(一一)

ど一様に管理された通貨となつてゐるのであります。

然らばこの場合はどう云ふ政策に依つて紙幣の價值が維持せられたかと云ひますと、それは主として爲替政策に於て行はれたものであります。通貨の對外價值の表現としての爲替相場を安定させて置く事に注意が向けられたのであります。

最初金兌換を停止した當時は一時爲替の引下競争が各國の間に行はれ、我國の圓貨も金をはなれた當時は忽ち下落してその低下の程度は一時著しき程度にまで達したのですが、そうかと云つて各國通貨の價值は唯自然の下落又は變動に放任せられてゐたかと云ひますと、決してそうではなく、我國等も昭和七年資本逃避防止法を公布、更に翌八年の爲替管理法が制定せられるなど、諸種の管理的政策によつて一定の水準に於てその價值を維持しようと努めまして、その結果今次大戰前數年間は大體に於て各國通貨の間に一種の相對的安定が見られたのであります。

この間にあらはれた我國の政策としましては、昭和九年の秋頃から圓貨を英貨磅に釘付けし一圓に對する一志二片の水準を固守したのであります。其後英獨開戰に伴ひ磅の自由取引が著しく制限せられましたので

昭和十四年秋、米弗に切替え釘付を行ったのであります。即ち二十三日十六分ノ七でありました、そしてこれが大東亞戰爭勃發まで続けられたのであります。然し前にも申述べました如く、今度の管理通貨法は過去に行はれて来た既成の事實を法制化したといふことに止まるとしまして、大東亞戰爭の開始によつて從來の爲替機構は一應破壊されたことになり、方法が工夫されねばならないと考へられるのであります。従つて茲で考へられる事は斯様な戦時に於ては如何なる通貨管理政策が爲さるべきかであり、これに關聯しては從來の管理政策について一考を要するのであります。

三

從來の通貨管理の方策は主として爲替相場場の安定、即ち爲替統制乃至爲替管理に置かれてゐましたが、先づ爲替統制を平易に云ひますと、大體爲替市場に於ける圓の賣買に依つて圓貨の價值が騰落するのであります。政府は圓が下がれば圓を買ひ、圓が上れば圓を賣つて其價值を安定に保たんとするのであります。従つて政府はこの場合、爲替資金の手持を多量に必要とするのであります。英國の如き一九三一年金本位を離脱して後は、これに伴ふ磅の下落と絶えざる變動を防ぐために多額の資金を以て爲替平衡勘定を設定し、この勘定を以て買支へ、賣向ひを行ふことに依り磅の相場を安定ならしめ得たのであります。又佛のフランの平價再切下を斷行致しました後は英米佛三國の間に金移動に關する協定を締結しまして三國間に於ける金の移動を割合に自由としたために、三國間の爲替統制を更に容易ならしめられました。然しこれに反して金

準備の豊富でない獨伊の兩國は最初から爲替管理に訴へてその通貨の爲替價值を維持するに努め、英米佛などの如く爲替統制は充分に行ひ得なかつたのであります。

我が國の之に對する對策としましては、昭和八年爲替管理法を制定し、爲替の賣買を制限して相場場の釘付を圖る爲替管理の方法を採つたのであります。しかし茲で注意すべきは、爲替の賣買を制限すると云ふことは、必然に其賣買の原因となる外國貿易を制限することゝならざるを得ないことであり、即ち此意味に於て通貨政策たる爲替管理は、物資の側に對する政策とも云ふべき貿易管理を反面に伴はざるを得ないのであります。

四

處が通貨管理に關しては、通貨價值の安定をはかる點からもう一つの重要な側面が考へられます。それは國內に於ける通貨の價值であり、云ひかへれば通貨の對内價值は國內の物價水準によつて測定せられるのであります。この意味に於きまして國內の物價管安定は通貨管理の今一つの目標となるのであります。そして國內に於ける通貨の價值は國外に於ける爲替による價值と兩々相俟つて安定せられなければならないものであります。

現在までは爲替統制、爲替管理など對外的な側面に主眼が置かれて參りましたが、大東亞戰爭勃發以後は從來の對外的な經濟關係が殆ど杜絶同様となりましたから、寧ろ對國內の方策が重視せられなければならない様になりました。

尤もこれまでとても通貨管理の國內的側面が全く無視せられたのではなく例へば、近年英國爲替平衡勘定

の運営に於ても、亦米國の金不貽化政策などに於ても國內の通貨數量調節を顧慮して巧妙に運用せられたことは事實であります。

さて國內的に通貨を安定ならしめる眼目は、國內通貨の量を調節して物價の騰貴を抑制することにあります。物價を安定せしめるためには騰貴せしめないやうに通貨數量を調節する從來のやり方はどうであつたかと云ひますと、最も簡單な方法は御承知の如く通貨の發行を金の増減に應じて行ふ、即ち從來の金本位制の建前で行へば良いのであります。尤もこれで間違ひなく物價の安定が所期せられ得るかについては多少の問題がありますが、現在はその金は最早や標準とならない。金準備の在高位は關係なく通貨が發行せられてゐると云ふ狀況であります。斯様な、狀況の下に於て國內物價の自由な騰貴を抑制する事、云ひ換へますとインフレーションを防止する事が必要なのであります。其ためには先づ何よりも通貨の發行高を法律に依つて制限することが考へられます。この點から從來の金準備の高による通貨數量の増減をやつて来た發行制度に代へて、準備の如何に拘らずその發行高の最高を限定する所謂最高額制限發行制度が考へられたのであります。昨年来日銀の發行制度は兌換銀行券條例の臨時特例に關する法律によつて、この最高額制限に改められてをります。

然し法律上最高發行額を規定しても、生き物たる經濟は法律の規定のみによつて、直ちに其通りの結果があらはれて來るとは限りません。現實の發行高が常に法定の最高限度内に止まるといふ保證は與へられないのであります。即ち通貨に對する需要の増大に依つて、時に法定の限度以上の發行が自ら生ずるに至るのであります。そこで實際問題としては、現實の發行高を此法定の最高發行高の限度内に、如何にして留めて

行くか、肝腎な問題となるのであります。例へば金準備併度に見ましても、我が國では純金一匁を五匁として法令で規定してありましても實際に金の無制限買上げ（自由鑄造）及び金兌換の實行を缺いだらば現實に法定の等價關係が成立するとは限らないのと同様でありまして、茲に通貨數量の管理的制限が重大な意味を持つて来るのであります。

從來通貨數量の調節をはかるために、貨幣當局が一般に用ひて來ました方法は信用統制策としての金利政策と公開市場政策であります。

五

處がこれらの政策は戦時にあつてはその運営は自由には行ひ難く、又効果も十分擧げられないのですが、例へば通貨膨脹を防ぐためには、先づ金利の引上政策が行はれて來たのであります。戦時にあつては財政上の理由、其他によつてこれが自由に用ひられない様な状態です。即ち第一の金利引上げの政策は政府の財政が許さないのであります。又金利關係を別として銀行が貸出を抑制しようとしても、一般の私的企業に對して行ふ事が出来ませんが、政府に貸付ける對政府貸付の關係では行ひ得ない事になり、又軍需産業に對しても貸付を制限する事は生産に支障を來たし不可能であります。即ち政府の必要とする軍事費其他のための通貨造出は戦時であるためにその必要の上から抑制は出来難い事となるのであります。次に公開市場政策であります。これは御承知の如く、日銀が公債引受に依つて造出した通貨を、日銀が其引受公債を市場に賣却して再び回収し、通貨の膨脹を抑止すると云ふ關係に於て、從來より行はれてゐるのであります。ところがこれほどの程度に通貨抑制に貢獻する事が出来る

かと云ひますに、問題は何よりも通貨の數量と物價の動きとの關係であります。即ち一般に通貨量と物價との間の關係は、物價が原因となつて通貨の量が定まるといふ風に屢々稱へられてゐます。即ち貨幣數量説的な見解であります。私見を申し上げますと事實の因果關係は寧ろ逆でありまして政府が公債を發行しそれで物資を需要するとこれによつて物價騰貴が齎らされる従つて通貨の量が膨脹すると云ふ關係があるのであります。通貨は物價と取引の狀況に依つて必要とせられる高だけ流通過程に吸収せられるのでありますから、公債の消化は此必要量以上に過ぎ込まれた通貨を回収するに役立つ政策と見るべきでありまして、これに依つて積極的に通貨を縮小して物價を抑へると云ふ効果は餘り期待出来ないかと思はれるのであります。故に今日に於ける通貨價值維持の對策は寧ろ直接に物價を抑へ、消費を制限すると云ふ云はゞ物價側の對策に重點が移動しなければならぬこととなります。即ち諸種の物價抑制策が講ぜられ、且つ貯蓄奨励や切符制度による消費そのものゝ規正などの諸對策の効果が確實にあらはれて來れば一般取引のために流通過程が必要とする通貨の數量を著しくは増加せしめる事がなくせう。政府の支出した通貨は流通過程に止まる事なく中央銀行に還つて、公債消化も容易に行はれることとなります。

ですから管理通貨の問題は雲の上の事ではなくて、直接に現在我々の身邊に起つてゐる物價乃至物資に對する諸政策に關聯して通貨の膨脹抑止などの側から行はれてゐるのであります。

六

今も申します通り、戦時に於ける通貨管理は必然的に物資の側に對する諸種の政策を伴ふ困難な複雑なもの

のとなつて來るのであります。現在の我が國としましては國內物價の安定は、戰時經濟の支障なき運営と國民生活の安定のために、必要不可欠からざるものであります。又金をはなれた通貨にとつてその對外價值を確保するためにも必要な基礎的條件であるのであります。

東亞共榮圈といふ自給自足的經濟圈の確立といふ問題に關聯して、圓はその領域に於ける諸通貨の中心的通貨となるものであります。圓貨の價值安定は重要なものとなつて來ます。従つて今後の我が通貨管理には又新しい任務が附加される事になります。即ち圓貨に對する國外の信用を高めて、その上に圓貨が通貨本來の機能を發揮し得るやうにして、東西共榮圈經濟に於ける我が通貨の地位の確立に努めることが通貨管理の眼目となつてくるのである。

本間俊平先生講演集

天 颯 (山口辰雄編)

信仰と熱と至誠の權化である本間俊平先生は靈界の偉大の存在である事は歎々するまでもない。

「信仰とは望む所を確信して疑はない事である。未だ見ざる所を眞也と信する大膽不敵の勇らしい心を信仰と云ふのです。人間からこの信仰を取り去つて終へば、もはや萬物の靈長ではなくなりませう。」と云つて自己の信念の下に苦難の道の中に至誠と熱とによつて喜びを見出しつゝ本年既に古稀の齡を重ねられたとも思はれない熱烈火を吐く講演に、東奔西走、只管鑿鑿として天職に奉仕してゐる先生なのである。

本輯は先生の講演を前後三年に亘り、先生に深く私淑する山口辰雄氏の努力の結晶として筆録されたもので、本間先生の氣魄と信仰が脈々と傳へてあます處がない。

因に本摘録はB・六判七〇頁、實費三〇錢（送料三錢）で學内給品部、又は振替大阪六五二七六番（山口辰雄宛）で頒たれてゐる。

共榮圈經濟學の課題

森本茂雄

一 共榮圈の有機的結成

ペルリ來航以來八十八年、昭和十六年も暮れかゝらんとする師走の八日、突如として展開された今次戦争は、鬱然たる潜勢力を孕んで滿洲、支那兩事變の蓄積打破とともに、猛然勃興したる新時代の契機となつた。アジアのためのアジアは、いまや猛烈なるスピードを以て實現されつゝある。東亞地理の論理が要求する歴史の必然たる歐米の東亞の、東亞の東亞への還元は、恰も物理現象の如き流轉の自然さを構成する。力に對するに力は、假令それが血の鬪争として顯現すると否とに拘はらず、所詮生きとし生けるもの、隨伴者だ。雄渾な作戦と深遠な新東亞建設の構想は、相表裏して全東亞を灼熱の坩堝に投げ込み、盟主日本の若々しい時代の息吹きと、力強い指導理念によつて、更生されようとしてゐるのである。

大東亞共榮圈確立の問題は、畢竟するにかくの如く、米英的な世界經濟の周縁であつた南方諸地域を、如何にして米英より東亞へ轉轍するかにある。換言すれば、日本を中心とする共榮圈の中に、その産業と資源とを如何に轉換させるべき

かといふことに歸着する。従つて問題は漫然と南方の何處から何が出るか、それに對して何が出るかといふことではなくて日本の産業の構造と、他の諸地域の資源とが、如何なる風に共榮圈と稱する超國民的な經濟構成員の中に、有機的に組合さるべきかゞまづ把握されねばならないのである。

しかし自然にかくの如き有機的聯關の醸成されるのを待つてゐたのでは、戰略の今日の狀況からは問題にならない。こゝにそれを如何なる方針で推進し、以て現下の大東亞戦争の日本側の戰略的な地盤を、如何に占めるかゞ要請されるのである。

大東亞に於ける經濟建設、殊に當面の課題となりつゝある南方對策は、究局に於いて東亞諸國家、並に民族を一體として解放自立せしめるといふことに志向してゐる。それは日本並に東亞の政治目的を達成するための、同時にまたこの政治目的自體を表現する經濟秩序の實現を意味する。だが今日の段階に於ては、南方諸地域は日滿支の紐帶とは自づと異つた性格をもつことは勿論である。南方に於

二 共榮圈經濟學の成立・發展

では何よりも日本の絕對的防衛力を確保し、治安を維持するための措置がすべてに優先すべきは論を俟たない。

戦争の目的を貫徹せしめるものが戰略であるやうに、戦争經濟の目標を達成せしめるものは經濟戰略である。そして經濟戰略を決定するものは、いふまでもなく戦争經濟の理念であらう。當面の經濟戰略は米英的經濟力の粉碎、これである。即ち敵經濟力の殲滅といふことが經濟戰略の根幹であらねばならぬ。同時にこれがためには、日本自體が相當多くの自己革新を内包するものであるが、このことは、また大東亞共榮圈建設の主體性を確立するためにも必然のことである。

共榮圈確立のためには、假令戦争行為が終熄し、外交的に平和が到來しても、わが國が今後の使命を達成すべき軍備は膨大なものとならう。従つてこれを維持するには多大の經費を要し、またこれが基礎たる生産力擴充も依然繼續されねばならない。今次議會に於ける賀屋藏相の言の如く、戦争終了後、財政經濟の平時復活は早急には不可能なことであつて、こゝに大東亞共榮圈經濟學の存立理由、並にこれが發展の意義を見出すのである。共榮圈經濟學は戦時下經濟機構の整備といふことから出發し、大東亞共榮圈といふ超國家的な一大廣域經濟圈の成立、並に維持に關與する經濟問題を取扱ひ、

考察する學である。従つて必然的にその所論は、政策論に占められ、特に目的合理的な具體的妥當性を具備する政策の價値判斷を内容とする。

かくの如く共榮圈經濟學は、抽象的法則の探求は從とし、具體的妥當政策の價値判斷を主とするものであつて、即ち存在意義よりも當爲の善を考究する學である。研究の第一段階としては、日本經濟機構の時局的態變と、これが編成替をとりあげ、共榮圈内重要物資の有効利用、共榮圈物動計畫、計畫貿易、物價問題、通貨問題等を手初めとして、占領地の經濟復舊、開發問題、共榮圈國土計畫、交通政策、金融問題等の綜合的有機的研究と、而して當面せる日本の經濟戰略とを併せ考究することを根幹とする。

大東亞共榮圈經濟確立のための政策學として、かくの如く立論するときは、一種の綜合的學問として、東亞共榮圈といふ地域の内包する經濟現象を百科全書的に取扱ひ、考究するかの如く受取られ勝であるが、かくの如きものを意味するものでないことは勿論である。確乎たる指導理念の下に、更生新東亞を築く底の政策を取扱ふ學であるから、そこには理論的究明と、現實的把握の二者一體的な學問的性格を内包せることは、言ふまでもないことである。淵源する理念は、もとより八紘爲宇の皇國精神にあり、東亞諸國家並に諸民族

をして各々その所を得しめ、日本を核心とする道義に基く共存共榮の秩序を確立することにある。

三 資源調査の要請

これが經綸の實際に當つては、過去五十年に亘る米英の極めて苛烈な搾取と文化發達の阻害に鑑み、殊に南方植民地國家に對しては、周到な調査と準備を要することは勿論である。この意味に於いて、何よりも先づ調査團の派遣といふことが考へられなくてはならない。搾取の對象として、ことさらに開發を阻害し土着民族を虐げて來た從來の植民地經營團は、ひたすら自己の都合よき産業のみを發達せしめ、その必然的な姿たる原始産業に彼等を束縛したことは、見通すべからざる事實である。

土着住民を操つる斯の如き政策は、事毎に見られる帝國主義的搾取政策の現實であるが、また一面先進諸國に對しては事實を覆ふ黒いヴェールを以つてひた隠しに隠す隱匿主義の何ものでもない。從つて搾取者たる彼等の書いた論文なり、調査書類なりが、如何に名文、俊筆であらうとも、事實に相違すること甚だしいと言はねばなるまい。

これはとりも直さずかれらの植民地操縦綱領の筋書で列強角逐の國際場裡から

他國の食指を避けるためのスポイルに外ならないのである。從つてかゝる著述を信用し、これに政策を盛るといふが如きは、吾人の採らざるところである。嘘偽と悪意の宣傳によつて、デッチ上げた語々の南方經濟の洋書は、この意味に於いて採るに足らぬ創作と見るべきであらう。資源統計數字の意識的な錯誤も見通すべからざる事實である。

ペダントの好んで讀み、且つ究明せんとする資料が、もしかの如き不信用極まるものであるとするならば、そこには據るべき何等の價値もないであらう。もしそのことすら知らずして、得々と調査の基礎として引用するときは、全く彼等の策に乗せられたものといふべきである。太陽に恵まれ、天産物豊かな南方地域に於て、殊更に事實を覆へるもの少しとしない。それらの一切は、いまや白日の下に暴露されんとしてゐる。

このことは土着民の福祉に寄與するとはいふまでもないことであるが、延いては世界經濟に寄與し、人類の幸福に資することは、いまさら吾人の喋々を要しない。着手の時は來た。輝やかしい、皇軍の戦果とともに、隠されたる寶庫は、飽く迄もあるがまゝの姿として究明され、把握されるであらう。南方資源調査團の派遣は、かゝる意味に於て是非實現されねばならぬことである。而して一日も速

く實現されねばならぬ。覆はれたるヴェールの剝奪は、かくて現實に行はれ、共榮圈經濟政策樹立の上に貴重な貢獻を爲すであらう。かくてこそ南方經濟を正解し、日本の當面せる經濟戰略に資することが出来るのである。共榮圈經濟學はこれを基礎として究明されて然るべきこと勿論である。

四 現下經濟戰略の核心

論じ來り論じ上げれば、共榮圈經濟といふが如き大きな課題を限られたる紙面に盡すことは全く不可能事に屬する。從つてこゝでは主として共榮圈經濟學の成立とその發展について考察して來たのであるが、學體系、學問論は他日の機會に譲り、現下の經濟政策の當面の課題ともいふべき共榮圈物資交易問題の痛たる交通問題就中船舶交通問題を探り掲げることとしよう。

かゝる突飛な問題をテーマより殊更に離れて採り挙げたる所以のものは、現在當面せる諸々のわが國內外の經濟問題が一つとしてこのことに係はらざるなき重要モメントを形成せるからに外ならない。船腹不足が現下わが國の最大悩みであることは、今更吾人の喋々を要しないことであるが、平時に於けるが如く、チャーターといふが如きは到底望まれない當面の歸結として、必然的に造船に依る船

腹擴充といふことしか方法はないのである（これが消極的には船腹の維持といふことも當然行はれてゐることであり、洋上ゲリラ作戦の粉碎によるわが商船の保護と、拿捕船舶の利用、撃沈船の引揚げといふことも當然考へられてゐることである）。

船舶問題は單に物資の運載者たる船舶の問題のみでないことは現下の世相を勘考せる識者の等しく首肯されることであらう。それは單に物の運載者たると同時に、實に日本戰爭經濟の運載者を意味する。近代戦は實に經濟戰、就中資源獲得戰であるところに、このことは明瞭に把握されるのである。

然らば船腹擴充の方途如何。原料手當の鐵鋼を以ては語り盡せないが、しかも特に放置し得ないことは能率生産といふことであらう。大東亞戰爭完遂型ともいふべき規格造船が、この際最も合理的な方法である。船體は言ふに及ばずエンジンから舵に至るまで、統一規格による分業急ピッチの集積こそ、銃前の將士に報ゆる銃後産業の努めだ。吾人が提唱する共榮圈經濟學の一内容を爲す經濟戰略の核心、船腹擴充の問題は、かくて解決への努力にアツビルする。それとこれとを勘考するとき、學としての共榮圈經濟學はますます發展せらるべきである。

戰時配給制度と百貨店の將來

——校友會二月講演會講演の要約——

加藤 昌 秀

現在我が國に於ける配給機構には、今次の大東亞戰爭の勃發する以前又はその直後から非常な變化が起つて來たが、専門の研究者でない私はこれを批判する餘地を見出さない。然しその變化の眞只中にある者として、これらの問題に伴ふ今後の見通しを私見的に行つて見たいと思ふ。

私の直接關係してある百貨店について云へば、今や百貨店は食料品を初めとし、食堂、衣料など重大時期に當面してゐると云へる。現在百貨店では食料品は過去に於ける殷盛にひきかへて、その面影は殆ど見受けられず、衣料品は切符となつて品數は制限せられ、食堂は食堂營團の考慮が傳へられるに及んで、その前途は見通し難い。百貨店は過去に於てはその名の示す如く百貨競ひ集つた處であつたが、今後配給制度整備に伴ひ、如何に動いて行くか、先づ衣料の側から之を見た

て、如何にすれば物資を公平に分配する事が出来るか、即ち消費規正を目標に行はれたものであつた。この切符について見ると年齢別による點數の差異、男女別による差異など相當綿密である。英國のこれについて見ると、獨逸の成年一五〇點に對して英國は六六點であるが、實質に於ては獨逸に比較して遙かに餘裕を持つて割當られてゐる。この點より見れば

當時の英國は獨逸よりも更に相當長期の準備があつて、これに掛つたらしく思はれる。

我が國の切符制度は獨逸のこれと酷似してをり、その一、二に就いて云へば、この衣料切符から除外せられたもの即ち購入するに切符の不要なものとしては、カーテン、帽子など購買回數の少ないもの、又は原料が少なくてよいものなどで、我が國の規準が畧々この點にあるあたり準據するところとなつたのではないかと考へられる。只相違する點は我が國は都市と田舎によつて點數に差異が附けられてゐる點で、これは洋服、和服の消費される特殊事情を考慮しての事らしく行政的に區分されたのではなくて經濟的な區分である。

的に大阪は三百五十萬の人口を持つてゐる。處が正午に於ける經濟的見地からの人口はこれを遙かに超えてゐる。だからその時の人口を考慮しなければ配給數と不均衡を起す場合があるのである。従つて地域別に行はれる切符制の場合切符はあつても品物がないといふ所謂空切符の問題が生じて來る。又この外に買溜の値の高い晒布、タオル、ネル類、靴下などが、これ等が買溜される場合、他の需要者の分が無くなるわけであるが、これについては、切符は件數を制限してゐる。

ものがあつた。三、合理的仕入による安價四、豪華である。五、サービスが良い。六、部門計算による經費の安價。によつたのであり、これらの點から顧客をひきつけ、他の一般小賣店、市場よりも優位であつたのである。現在そのどの部分が残存してゐるか云へば、一、二、六については尙も持ち續けられてゐると思はれる。

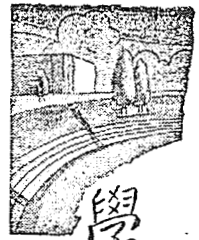
前述の諸點を完全に把持してゐない點で昔の百貨店は存在しない事になるのであるが、それならば現在の百貨店はどうかと云へば、高級な市場、高級な配給所としての意味より持たない事となつた。

要するに獨逸に於ては、衣料品は一、過去の實績二、供給能力三、政治目的達成助長四、技術的方面などに考慮がはられてゐる。同様の事が我が國についても云へるので、物動計畫のねらひは衣料を先づ二十五億圓位に抑へようとする點にあるらしく、その基準は月收百圓程度の中位の家庭の實績を中心として制定されてゐるので、これを製品の上から云へば一年間一人當り四反分の織維といふ事になる。

この様に配給機構が變つて來たので、これに伴つて百貨店の將來はどうなるかと云ふと、今のところその客観的な方向については示す事は出来ないが、茲では私の私見的な開陳に止めたいと思ふ。

先づ過去に於て百貨店が盛であつた原因は、一、大資本である。二、あらゆる

その一は賣上が大部分百貨店に集まつて有利だと云ふのである。即ち點數の制限内では慎重に考慮して、信用ある店に向ふだらうし、又同一點數ならば數多く、ものが見たい、そこで顧客は百貨店に集ると云ふのである。これらの事は獨逸の事情に照して明かである。之を數字的に擧げると、今までの百貨店は全衣料消費の約六割、東京大阪ではそれ〃七割を占めてゐた。現在では當初の事でもあり數字は固つてゐないが、大阪全市の百貨店、小賣店の扱ふところでは切符一點畧々五、六十錢となり百貨店のみ平均では一圓程度となつてゐる。そこで假り



學内報

大東亞戰爭戰捷

第一次祝賀式舉行

二月十五日英國の東亞に於ける最大據點シンガポールの陥落により開戦以來三月月に及ぶ大東亞戰爭の戰捷祝賀としてその第一次行事は十八日全國一齊に行はれたが、この日、本學でも千里山、天六兩學舎に戰捷祝賀式を舉行した。

即ち學部、豫科では千里山學舎運動場に午前九時全教職員學生參集、國民儀禮ののち學長の祝辭あり終つて萬歳三唱して忠靈塔參拜、佐井寺の伊弉諾神社に參拜した。又專門部では第一部は午前九時天六學舎集合、式典舉行の上天満天神に參拜、同第二部では午後五時より折からの學年試験を中止して式典を舉行した。

大學豫科修了式

第一大學豫科第十八回、第二大學豫科第八回修了式は三月十四日午前十時より千里山學舎豫科講堂で舉行、國歌合唱、證書授與の後、神戸學長の新修了者に對する訓諭あり答辭あつて式を閉じた。因に當日證書授與を受けた者は左の通りである。

りである。

第一豫科 三四名
第二豫科 一六三名

豫科補修授業

在學年限短縮に伴ひ大學豫科の在學年限が極度に短縮されるので學年試験修了後、三月二日より同十二日まで現在の第一豫科一、二年第二豫科一年生に對し大學年の補修授業が行はれた。

入學試験施行

昨年度の入學志願者の激増につれて本年も本學では例年に倍する志願者があつたが、夫々左の日程により入學許可者を詮衡、發表した。

大學部——三月十七日入學試験、同二十一日發表
大學豫科——三月十九日第一次考査、同二十一日第二次考査、同二十五日發表

發表

專門部第一部——三月二十二日入學試験、同二十九日發表
專門部第二部——三月十四、十五日、入學試験、同二十四日發表
因に本年度入學志願者数を示せば左の通りである。

▽學部—法文(二六) 經商(六三) 計(三六)
▽大學豫科—第一(五四) 第二(一九五) 計(三、四六)
▽專門部第一部—法(三〇) 經(六九) 商(一〇九) 計(二〇〇)
▽專門部第二部—法(六七) 經(六四) 商(六七) 國漢(二六) 英(五) 計(三、五八)

協議員 武田貞之助氏

明治二十四年關西法律學校出身で本學協議員・辯護士、元代議士の武田貞之助氏は去る三月十一日午後九時急性肺炎で芦屋市西新田の自宅で逝去された、享年七十五、氏は滋賀縣出身、明治二十五年辯護士試験に合格、開業の傍ら四十一年郷里より代議士に當選、四十二年代議士團の一員としてシベリヤ各地を視察し大正十一年には北京に開催の國際辯護士大會に有士代表として出席、昭和四年選舉狀況視察のため渡英ののち歐洲各地を視察し歸朝後、九年選舉廳正中央聯盟理事、本年二月大阪市選舉廳正委員に擧げられ現在に及んでゐた、この間本學協議員たるほか司法保護監察員、大阪商業學校理事など法曹界、教育界に功勞するところ尠くなかつた。

かくほ、う抄

▽小泉關甲南校長—多年實業教育に盡瘁ののちにより今回財團法人實業教育振興中央會より表彰、賞杯一組贈られた。
▽金員寄附—昭和十六年十二月專門部第一部法律學科卒業の森口信幸君の入學に當り母父増太郎氏より金五十圓を本學に寄附せられたので、これを記念して書籍を購入する事となつた。

(六頁ヨリ)

に一點五十錢と見ても、更に三割程度の棄權を豫定しても大阪全人口で年額一億二千萬圓、近郊都市を入れて一億五千萬圓、この内百貨店が七割を占めるとすれば八千五百萬圓だから、これを平年に比して、大阪八百貨店で一億九千萬圓程度の賣上中衣料品は五割で、九千五百萬圓従つて該當する商品は二割減、賣上高は一割減とならう、經費の點では相當削減されるので經營危殆には陥入らないといふのである。

その二は不利であるとするもので一、仕入の不圓滑となる結果として配給が思ふ様に行かない。

二、食料品の獲得といふ事が人手を取つたので、今までの様に顧客に時間の餘裕がないため、百貨店へ足が向かなくなる。

三、食料品の地域別配給により、從來食料品で引きつけられた顧客が他の商品も購買してゐた所謂廣義の暗示販賣が不可能となつた。

四、商品の規格が統一され、種類が極度に減少したので、百貨店の魅力が失はれた。即ち百貨店にはその特質を失はしむるものとして重大問題となる。

などの點が擧げられるが、前述の數字などから包括的に見て、百貨店の經營困難は衣料品の側からはあまり苦慮さるべきものではない。たゞ食料品、食堂などについては相當困難な問題があり、種々な點から經營面に及ぼす影響は可也重大であると考へてゐるが、時間の關係でこゝでは觸れずに置きたい (文責記者)

校

時事問題を解説

三氏による講演會開催

十一月の校友總會當日の末川博士の「臨戦體制と國家總動員法」の後漸次途絶へてゐた校友會の講演會は昭和十七年に入つてその第一回を二月二十五日午後五時より開催した。

今回は講演會の新機軸を現出したもので所定時間約二時間を三氏に分擔最近の時事問題を探り上げ加藤昌秀、志野覺治郎、森川太郎の三校友に依頼、始終熱心に聴講する校友多數を得て午後九時過ぎ終了した。

講師及び演題

「戰時配給制度と百貨店の將來」

大塚百貨店勤務部長 加藤昌秀氏

「戰爭保險について」

太平洋海上火災取締役 志野覺治郎氏

「管理通貨の諸問題」

母校教授 森川太郎氏

同夜先づ本會常任幹事三島律夫氏の開會の辭に次いで、加藤昌秀氏の戰時配給制度、就中衣料切符の沿革とこれに伴ふ百貨店の現状及將來について具體的に示され(別項参照)續いて志野覺治郎氏登壇

戰爭による損害補填の策として取り上

友

x x

げられた戰時保險臨時措置法は特に航空機による空襲損害を目標としたものであり、その實際の取扱ひについては同法施行規則の公布後、一般に火災保險の課せられてあるものについて掛けるのを通則とし又その手續、保険料割合支拂方法など實務的な方法について述べられ、次で政府の之に對する法律違反の取締方法などについて繰述せられた。

最後に母校教授森川太郎氏は最近の通貨管理の問題を探り上げてこれを學說的見地から平易に説明された(別項参照)かくて講演終了後別室で有志のみ三氏を圍んで座談會を開催有意義に終了した。

武運長久祈願祭

堺支部第二回總會

昨年二月二十二日堺大濱公會堂に於て盛大なる發會式舉行後の堺支部は前線勇士への慰問、入營會員の激動、護國の英雄會員林千一氏の遺家族慰問、校友會各行事の速報、會員の増加運動等躍進的活躍を遂げ來りたる處滿一週年を迎へたるを記念し二月二十八日森川教授、神屋敷校友會主任の御参加を得奈良市に集ふ。

春日神社の大前に森川教授並に支部長恭しく玉串を奉奠し果敢以て身命を皇國

に捧げられたる林千一氏の英雄魂へに靖國の宮に鎮り炎熱瘴癘の地に或は萬里の怒濤と戦はれつゝある出征勇士の武運愈々長久ならん事を祈念し銃後國民の死一死報國の決意を堅くす。

午後五時奈良ホテルに於て第二回總會を開催す楠野支部長より發會後の經過報告を兼ね御援助と鞭撻の沓まれざらん事を希望して挨拶とし淺香幹事より前年中の事業と收支決算を説明承認したる後、森川教授より母校の近況を聞き晚餐にうつれり奈良ホテルは靜かで美しく且つ豫想以上の御馳走あり出席者何れも生活、家庭、時局を語りつゝ支部の今後を語り合ひ最後に學歌の合唱と萬歳三唱をし和氣藹々の内に散會したのは午後八時三十分であつた。

- 當日は出席者は左の二十四名なり
森川太郎教授 神尾敦良校長校友會主任
楠野 泰夫 堀畑 輝一 井上專一郎
中村源次郎 上西嘉太一郎 今井恒雄
富田金三郎 藤田 肇 井村 智昭
池田 利美 井上 義雄 市川 信
岡崎 繁 桑原 正男 浦地 辰雄
諏訪 富雄 小西 登一 井上 竹藏
中島富三郎 河崎 隆常 大野 俊根
淺香要太郎

會員消息

氏名下の數字中、漢字は大正年數、算用數字は昭和年數を16前は三月、16後は十二月卒業を示す、又括弧内にある消息は業務動靜

共同事業など計畫
奉天支部第一回例會

大東亞戰爭初の新春を迎へて奉天支部では一月二十二日午後七時半より第一回の例會を例の平安廣場明治製菓グリルにて開催した。熱意ある十八名の校友出席して、和氣藹堂の盛大であつた。

本年は滿洲國建國十周年として三月には大山建國大學教授を招き講演會開催を計畫したいとの意見が出るやら、共同事業をやりたいたいの熱烈な談論に花を咲かせ時の過ぐるのも忘れる程であつた。

學歌齊唱散會したときは正に十時半であつた。當日出席者は
出井、堀澤、河井、西川、金原、長崎、黒田、寺町、直吉、池田、上岡、小川、牧野、中村(屯)、村上、山下、飯田、五島、

岡井 泰雄(16前) 東中市麻布區新網町

二ノ一、藤原方

木村 恂三(四) (警部、大阪府警防課)

北坂正二郎(9) 和歌山市湊桶屋町九

久保 金藏(2) (任警部、福島署)

坂田 種明(15) 南河内郡植生村植生野

大法

伊藤 新治(3) (警部、鳳警長)

泉本 正隆(10) (警部補、築港署)

上杉治三郎(15) 西成區姫松通五ノ一六

江里口正行(2) (任地方事務官、大阪府

商工課)

一六七〇三二
清水 定勝(四) 哈爾濱市道裡中央大街
一七、滿洲生命保險會社支店長)

鈴木 武夫(5) (佐倉鋼鐵工業會社顧問を辭し松原製作所顧問就任)
瀨部 輝明(16前) 臺北市福佳町四六
(臺灣總督府企畫部企畫課)

立石 寬昌(15) 奈良縣添上郡五ヶ谷村
菩提山一三九(自家營業)
花島 善吾(5) (任地方事務官、大阪府經濟部水産課長)

久井 忠雄(6) (內務事務官、內務省警保局)
廣田 弘應(8) (八洲精工會社)
藤本 清勝(7) (吳鎮守府軍法會議法務官)

村野 伸造(11) 兩區日本橋筋二ノ一六
宮崎方
山口 春一(16) 東淀川區三津屋北通一ノ二七、篠原翠松方 司法官試補、大阪地方裁判所)

山本 克己(5) (警部補、船場署)
大政
小野田 正一(16後) 京城市新堂町四三〇
朝運寮內(朝鮮運送會社自動車課企畫係)

栗本 義重(11) 東京府北多摩郡三鷹町奉禮四四五、井園住宅
大經
高垣 善一(14) (和歌山市會議長)
寺下 惠雄(16後) (大分市西新地、不動貯金銀行大分支店)

平井幸太郎(15) (安東市旭日區南二條通同和自動車工業會社安東支店)

松浦 孝一(16後) 東京市下谷區上根岸
五七、小幡竹次郎方(日本鐵鋼製品工業組合)

赤田 晋(15) (岸和田市立商業學校教諭)
與野 忠夫(2) (任警部、船場署)
葛目 成忠(三) 平壤府紋織里(七六) 七九

萩原 光三(15) 福岡市春吉一番丁六六
飯田 守(8) (朝鮮滿洲鴨綠江水力發電會社)

內田 堅(13) 鞍山市南一條町七五
金澤 文夫(16後) 東京市品川區五反田六ノ一九一、山内藤四郎方(安田生命保險會社)

木戸 孝三(8) 松阪市殿町一四六五
田中 殿(16前) 神戸市灘區赤坂通八ノ三五、河田なつ方(神戸製鋼所神戸工場庶務課)

西川 一行(14) 神戸市灘區大内通四ノ三一、中谷方
西村 龍夫(12) 島根縣飯石郡三刀屋町
橋本 好三(9) 泉北郡濱寺町船尾七七五ノ三

山岡 清二(14) 港區市場通三ノ二ノ一(雜貨商自營)
和氣 正之(15) 岡山縣都窪郡庄村松島五四五(中國銀行廣瀨支店)

池内覺太郎(明45) 奈良縣五條町二見、裁判所官舎(五條區裁判所監督判事)

出井 巧(6) (不二公司監查役)
今本 益雄(12) (大阪鐵道局大阪購買支部)

植島 博(6) (警部、中本署)
瓦谷 末雄(15) 明石市出崎町三八ノ二(司法官試補、大阪地方裁判所)

北田 康民(四) (警部、大阪府刑事課)
金 淵 輻(2) 布施市柏田一六三、金森製綱所

坂田 孝(6) (兵庫縣明石郡大久保町、神戸製鋼所大久保工場)
眞田 俊雄(明38) 臺南市竹園町二ノ六官舎(臺南地方法院檢察官長)

清水 萬次(三) 東京市澁谷區中通三ノ二四、官舎(澁谷署長)
下出 一雄(八) (地方警視依願退職、久保田鐵工所)

多和良三郎(3) 尼崎市難波本町七ノ四三三
玉野 力(五) 小阪田と改姓、岡山縣英田郡林野町三海田八一

堤 新吉(明39) 熊本縣鹿本郡山鹿町山鹿一六〇九
西井 大三(12) 岡本と改姓、神戸市兵庫區松本通五ノ二六

野崎 春夫(14) 岡山市中出町七八(任檢事、岡山地方裁判所檢事局)
原 仙吉(二) (警視大阪府保安課長)

原田 常義(3) (福岡縣嘉穂郡大隈町久恒鑛業會社)
中田 誠治(3) (滿洲國齊々哈爾市德茂胡同一號、大二公司)

深瀨 義廣(二) 竹五郎襲名、奈良縣吉野郡土津川村重里

藤川 正吉(16前) (滿洲國哈爾濱市埠頭區中國五道街二五號、日本海上火災保險會社出張所)

前田 幸男(16前) (大連市山縣通、堤商店內營口汽船會社出張所)
松島 諤(11) (關東州蕪岡店逢萊街二ノ二、蕪岡店第一金融組合)

松本 弘(明37) 奈良縣高市郡畝傍町四條
舞原 孝義(13) (新京特別市西七馬路一四、滿洲書籍配給會社)

水野 秀雄(14) 住吉區平野大道四八(日本社大阪第一指定組合)
光石 正次(2) (警部、依願退職)

宮水 保(12) (大阪市此花區島屋町五六、住友金屬工業會社プロペラ製造所勞務課)

宮脇 史郎(6) 今治國民職業指導所
米良貫一郎(2) (地方警視依願退職、大阪貨物自動車工業組合)

山内美知男(9) (任地方警視、九條署長)
山口 清(12) 滿洲國吉林省敦化縣青年義勇隊大石頭訓練所宮野中隊

山田 大熊(明45) 新京特別市興安大路三一、生命莊(滿洲生命保險會社新京第一支部長)

吉井 榮治(四) (警視、朝日橋署長)
吉岡 幸造(15) (大阪鐵道局吹田操車場驛)

吉田鹿之助(三) (司稅官、京都下京稅務署長)

吉武 邦男(16前) 廣島市愛宕町七一
 吉本 福治(16前) 廣島市水主町二一七
 吉本 延行方
 李 善 熙(16前) 岩城健雄と改姓名、
 大邱府市場北通町一一二

專二經

阿南 正成(7) 住吉區北田邊町三五九
 伊地知兼郎(13) 奉天市大和區日吉町四
 常盤莊内
 遠藤 吉次(7) 北支那河北省真定道石
 門市新開街榮陸里六號

大山 栗夫(15) 岡山縣後月郡西江原町
 神戶

岡崎 義雄(4) 兵庫縣武庫郡住吉村中
 島四二五(住友倉庫神戶支店)
 柏木 留吉(二) (東京市日本橋區江戶
 橋一、野村證券會社)

北川猪四馬(2) 西宮市松園町一三(北
 川機械製作所取締役社長)
 坂井 重男(14) 芦屋市打出寺開地一ノ
 一、小野義夫方

田村 只相(4) 長崎縣西坡村野崎戸町
 福浦、三菱鐵業會社々宅)
 千足 耕造(14) (神戸銀行瀧道支店)
 辻村 龍藏(16前) 京都府久世郡宇治町
 今内、坂本鐵藏方

原田 正男(4) 兵庫縣川邊郡園田村森
 松原三五五
 松井康治郎(13) 東京市足立區千住曙町
 三八、野澤方(朝日新聞東京本社)

三宅 萬吉(二五) 住吉區墨江中三ノ六五
 森田彦四郎(明44) (第一生命保險會社
 保全課長)
 山根 實(16前) (中華民國濟南市經

二路緯七路七、三興會社濟南支店)
 保田素一郎(7) 釜山府本町五ノ九(釜
 山放送局放送主任)
 專一商

淺野 繁雄(二五) 大阪市東區京橋三ノ壹
 井上 雄二(16前) 名古屋千種區田代
 町四谷三三八、田代ア、ト内(住友
 金屬工業會社、名古屋輕合金製造所)

伊場 信一(3) (地方警視、大阪府外事
 課長)
 石川 永次(9) 神戸市灘區八幡町二ノ
 五五

泉 正雄(9) (佃化學興業會社々長
 今田 義夫(三) 鞍山市南三條町八三
 (滿洲ロール製作所營業部用品課長)

大西 秀雄(二四) (神戸市漢東區相生町
 一ノ二七)
 神竹 一郎(14) (旭區野江中之町三ノ
 二五〇、安藤製作所)

川口 繁男(16前) 東淀川區國次町三七
 〇、筒井修方
 川口 吉郎(12) 東京市中野區大和町八
 〇、筒井修方

北村 勇(12) 兵庫縣武庫郡鳴尾村内
 敷島一一二
 鹽見 民藏(6) (大阪府織物工業組合)
 鷺見 幸雄(9) 新京特別市百瀨街、房
 產住宅五三號

田中 仁(14) 神戸市灘區德井町四ノ
 一七(日本エヤブレイキ會社)
 田中 吉雄(8) 兵庫縣武庫郡甲子園十
 番町(野村證券會社)

高橋比左也(15) 神戸市兵庫區水木通二
 ノ五ノ七六
 竹中治三郎(二五) 旭區今福中一ノ一八七
 (大阪市企劃部統計課)

豐住 豐喜(11) 熊本春日町八三三、
 吉本かき方(三井化學工業會社石油合
 成三池試驗工場)
 津村 英世(16前) 東京市下谷區御徒町
 二ノ四二、皆川方(日本大學法文學部
 政治經濟科在學中)

中島 政徳(14) (滿洲國北安省嫩江縣
 嫩江街、滿洲拓殖公社出張所)
 中谷 政男(三・10) 布施市寶持一四六
 寶持園住宅

平尾 正(4) 東淀川區瑞光通二ノ三
 一(野村製靴會社淀川工場)
 増田登米男(二〇) 横濱市中區本牧町三ノ
 七〇八

松井善太郎(5) (大正區大正通八ノ八
 五、三菱銀行大阪南支店泉尾出張所)
 松田 樞夫(11) 吹田市都呂須二七三二
 町 要三(三) 下關市清末鞍馬町二六
 三浦 孝明(16後) (兵庫縣相生町、播
 磨造船所)

山本春三郎(二四) 札幌市南八條一五ノ一
 三九四(日本銀行札幌支店)
 吉田 重信(16前) 大阪市東區木野町、
 省線高架下六七)

吉本 延行(8) (富山縣高岡、朝日新聞
 社通信部主任)
 專 文
 上羽 長衛(2) (秋田縣社會教育主事)

加藤田文英(2) (新京特別市豐樂路一
 四〇、滿洲村中名會取締役)
 川内平三郎(4國) (堺市北榎町一丁四
 三、日本生命堺東出張所)

木村 豐年(16前國) 住吉區平野西町三
 笹井 卓(16前國) 港區東田中町一ノ
 一三二、土岐正治方
 廣内藤四郎(11英) 中華民國濟南市經五
 路緯七路、濟南日本青年學校)

堀 實明(5國) (東成區生野田島町
 弘願寺住職)
 吉澤 義竹(16前國) 港區辨天町四ノ六

改姓名

六十一專商 深瀬 義廣 深瀬竹五郎
 六十五專法 玉野 力 小阪田 力
 昭十二專二法 西井 大三 岡本 大三
 昭十五專一法 金 允 石 金子 文亮
 昭十六專二法 李 善 熙 岩城 健雄

訃音

岩本 政市(明39專法) 元大阪市長、辯
 護士、去る二月二十二日逝去
 隅田 昇(昭15專二法) 昨年十月一日、
 中文戰線に戦死、遺族は西區土佐堀通
 三ノ一〇(父)章段
 永井 正水(昭15專二商) 本年二月歿死
 遺族は高知縣幡多郡清水町清水四三〇
 清水達太郎殿
 西川 七三(大13專法) 昨七月逝去、遺
 族は池田市中ノ島九〇ノ二、順殿

校友會費拂込者氏名 (その一)

一時拂

進藤 紫朗 奥田 光廣 藤井直治

昭和十七、十八年度分

藤岡 了暢 三宅 通夫

昭和十七年度分

- 中村 光輔 木下 裕 中橋 德藏 寺尾 全一
- 牛島 武雄 神竹 一郎 宮地 潔 林 登
- 辻村 龍藏 長尾 景平 八百村 稔 角谷 通天
- 法覺 豊松 隆之 杉山 健一 松永 三郎
- 森脇 秀正 大中 清一 森 安市 中内 秀治
- 金子 文亮 中島 光夫 田中 茂 淺沼 貴一
- 前川嘉一郎 安藤 文雄 泉 義三 島 寛
- 菅 二 中村 忠夫 小野 座一 山田 泰三
- 辻 正夫 清水 定勝 東條 武夫 友井伊三郎
- 柿原 拓 平田 新一 吉田 眞一 田中 敏夫
- 萩原 敏隆 川瀬 茂 村上嘉瑞男 土方 久榮
- 西井 大二 大饗 久夫 高橋 武男 瀬部 輝明
- 南 勉 松本 宏 寺西 敏英 山中 徳雄
- 三宅 凡夫 大槻 薫 加野 克己 山崎 大助
- 古賀 猛夫 山脇 一雄 江本 義三 植野 郁夫
- 遠部 心一 吉田 朝彦 松本 逸三 植野 郁夫
- 星野 信夫 河村 勝久 益田 正雄 桃井 忠雄
- 御前 義夫 名和田壽雄 佐野利三郎 筒井 清
- 西浦 健次 片岡 弘 鶴丸 周郎 稻森 道彦
- 横内 弘文 中川 敏男 坪内 源一 松山 勝衛
- 小倉 眞一 伊藤 久士 松吉 壽雄 石田 俊夫
- 谷澤 一男 前川 博 金田 雅一 後谷 眞夫
- 坪野 武男 鳴神 烈 板東 眞男 呼子 一雄
- 小野田 正 弓場 晴男 松井 正男 赤澤 道夫
- 西 義次 木戸 猛 久木秀太郎 山脇 伸雄
- 内藤 忠一 杉野 勳弘 黒川 善衛 山脇 伸雄
- 寺島 哲郎 星野 純一 大内 秀壽 山野 智亮
- 上田 方正 漆原 俊一 外谷 貞次 新本 智亮
- 萬谷 三司 和田 昭雄 濱田 數男 山村 義房
- 横山 正一 奥田 光明 横山 正武 岩郷 馨
- 瀧澤 敏三 吉田 實 中井 清 岩郷 馨
- 田中 隆春 西居 正弘 井上清次郎 龜井 一男
- 小和 三伸 坂 文雄 奥村 久美 牧野 宏
- 安間 賢 山村 彰 澤田 恒一 宮川 豊喜
- 伊勢 行雄 向井良太郎 橋本 定明 森 泰人
- 天野 一男 荒井 正治 宮原 正司 寺下 惠雄
- 佐藤 露夫 長知 武男 山澤 篤實 大塚 平夫
- 山内 正邦 石飛 義之 井口 禮 竹内 兼三
- 尾前 茂 富浦 弘信 宮井 禮 北野 繁
- 勢川 清郎 島崎 實一 龜 正英 八木 旭
- 伊藤 穂 北村 治郎 金重英太郎 高野 文則
- 崎谷 旭 鈴木 喜造 溝川 一清 高野 茂次
- 肥下光次郎 春山 芳一 白柳 利一 香河 英之
- 澤野 幸雄 神代 眞信 高橋 豊隆 藤本 敏男
- 奥村 一雄 武田 謙 寺尾三四太郎 赤松 頼達
- 鬼武 眞雄 安田 彰正 寺尾三四太郎 赤松 頼達
- 山田 恒一 徳井 悦哲 金 晋 根 長谷川順雄
- 福栴爾太郎 野村 正辰 金 健二 森 壽夫
- 三宅 登喜男 福田 茂治 川邊 健二 森 壽夫
- 野口 勝正 松本 源造 犬伏 正美 大田 克己
- 片岡 博雄 松村 藤次 齋藤 幸昌 妹尾 道雄
- 高橋 一敏 森藤 壽直 平賀 武男 藤本 眞男
- 矢野 正夫 荒川 眞彦 矢島 篤夫 山形 眞男
- 山根 素弘 美田信一郎 柳川 賢一 種谷 喜夫
- 江川 久正 坂原 三郎 米富 彌 阿崎 誠幸
- 北山 友一 宇野 確 増谷 勳 水谷 文一
- 秦 成七 山口 眞雄 前田 和彦 駒井儀三郎 浩
- 赤松莊太郎 河原 孝 田中 準一 村井 久三 清水 一郎
- 井川 秀雄 山本 武夫 山本 精一 清水 秀男
- 花谷六三郎 石川 茂吉 山本 精一 清水 秀男
- 南 廣治 尾崎 常一 中井 恒夫 野原 泰三 宮水 正晴
- 濱野 嗣郎 山崎 恒夫 大和喜和夫 桑村 直之
- 篠 寛一 磯部 武夫 井上 勇 松本 眞從
- 本田 勉 大山 順市 柳本 武一 野一色 行雄
- 阿本 茂美 岡本 忠雄 西川 健造 野一色 行雄
- 小林 辰雄 若林 勇 橋本 保男 福田 初雄
- 田中 邦輔 佐竹佐喜男 早川 實臣 園田 清
- 木村佐喜夫 民田 五郎 岡田 憲三 花田 輝夫
- 島 光治良 森田 光信 大河 俊次 岡崎 豊志
- 川崎 裕 志方 正八 河田 照夫 小林 修治
- 豊福 彪 松野 誠次 樋上 惣一 金光 直彦
- 上原 正則 村上 芳民 西谷 政司 谷口健四郎
- 中島 賢 原 美樹男 西原 大司 谷口健四郎
- 藤田 辰雄 山本 潤三 松原 岩雄 幸田 輝生
- 岸田 繁雄 加藤 修 清水善次郎 竹中 實
- 北野 繁 角田 精一 八木 新治 徳千代又一
- 山内 敏男 堺 謙介 角田 太郎 成田 君夫
- 北谷 正一 堺 謙介 角田 太郎 成田 君夫
- 松本 昌平 黒川 清 松原 章 大崎省三郎
- 北川 大 木村 慎 小西 藤一 浮穴 國男
- 松本 正雄 福井 一榮 小島 勉 津戸 吉郎
- 河村 昌美 高島 均 近藤捨之助 板垣 尚三
- 佐藤 孝重 杉森 均 中野 善一郎 板垣 尚三
- 石田 勘男 砂金哲野佑 仁科 園二 岩本 捨男
- 三俣 福男 森田 祥一 石橋 輝雄 阿田 百司
- 橋本 典雄 谷淵 和郎 宮田 直行 中野 善一郎
- 川副 康藏 町田 實近 土岐 浩茂 大場 一夫
- 姉崎 清信 渡邊重重郎 清水 信良 新井 宗述
- 乾 勝治 原 内 義夫 立木 啓介 今川 善夫
- 小山 梅一 竹内 義夫 香庄 孝治 丹生 理
- 栗田 俊雄 曾我部一男 赤堀 操 中野 幾三
- 松浦仁一郎 赤堀 操 中野 幾三 長尾三郎輝
- 谷口 浩正 赤堀 操 中野 幾三 長尾三郎輝
- 川崎 平 赤堀 操 中野 幾三 長尾三郎輝
- 大井 亨 赤堀 操 中野 幾三 長尾三郎輝
- 法覚 健三 赤堀 操 中野 幾三 長尾三郎輝
- 富田 淑郎 赤堀 操 中野 幾三 長尾三郎輝
- 衛藤 直之 赤堀 操 中野 幾三 長尾三郎輝
- 中尾 眞 赤堀 操 中野 幾三 長尾三郎輝
- 敷田 正美 赤堀 操 中野 幾三 長尾三郎輝
- 堀井 弘三 赤堀 操 中野 幾三 長尾三郎輝
- 延安 眞治 赤堀 操 中野 幾三 長尾三郎輝
- 小間井與一 赤堀 操 中野 幾三 長尾三郎輝
- 佐野繁次郎 赤堀 操 中野 幾三 長尾三郎輝
- 山下 徳次 赤堀 操 中野 幾三 長尾三郎輝
- 井上 勇 赤堀 操 中野 幾三 長尾三郎輝
- 木曾 増夫 赤堀 操 中野 幾三 長尾三郎輝
- 岡田 清敏 赤堀 操 中野 幾三 長尾三郎輝
- 平尾 秀夫 赤堀 操 中野 幾三 長尾三郎輝
- 平尾 秀夫 赤堀 操 中野 幾三 長尾三郎輝
- (以下次號)

文部書記官 有光次郎 校閱
 文部屬 小島末一 著
 價五・八〇
 下・二二

私立學校事務提要

附・學校關係法令

◆有光文部書記官推薦!!

有光文書課長序……小島君は多年文部省専門學務局に於て私立學校及び學校法人の事務を擔當し、常に正確周到を以て今日に及んでゐる。その仕事の折々に學校の經營維持に關する法令や取扱例等を蒐集整理してゐたのを、取り纏めて更に中等學校に關する部分をも追加して本書がなつた。學校の維持經營に當る人々の參考ともならば欣快の至りである。

本書の内容 本書は私立學校當務者の懇切なる伴侶たらんことを期し、務めて多くの制度上の實際問題に就て述べ、標準となるべき手續上の類例等を載せ、且つ廣汎に亘る關係法規をも蒐録することにした。當務者の執務上稱補するならば幸である。 著者 識

主要目次

第一章 總說
 第二章 學校に關する事務
 第三章 財團
 第四章 學校關係法規
 第五章 財團法人關係法規
 附錄

發行所
 大阪市北區會根崎上三丁目八 振替大阪三一九七二番
 東京市神田區駿河臺三丁目五 振替東京八一三三八番

昭和十七年三月十五日發行 關西大學學報第百九十七號

既刊經濟特殊研究叢書

- (一) 東京帝大前教授 矢内原忠雄著 帝國主義下の印度 價A 二・五 判四〇
- (二) 關西大教授經濟學博士 正井敬次著 金融論研究 價A 二・五 判四〇
- (三) 京都帝大助教授 堀江保藏著 日本資本主義の成立 價A 二・五 判四〇
- (四) 小樽高商教授 南 亮三郎著 人口理論と國際貿易 價A 二・五 判四〇
- (五) 大阪商大教授經濟學博士 堀 經夫著 地代論史 價A 二・五 判四〇
- (六) 長崎高商教授 伊藤久秋著 經濟思想と學說 價A 二・五 判四〇
- (七) 經濟學士 吉田秀夫著 新マルサス主義研究 價A 二・五 判四〇
- (八) 關西大學教授 森川太郎著 銀行職能論 價A 三・五 判四〇
- (九) 神戸商大教授經濟學博士 丸谷喜市著 價值及價格研究一班 價A 三・五 判四〇
- (十) 高松高商前教授 岩井茂著 異說貨幣論研究 價A 三・五 判四〇

大 同 書 院